

## ピアジェ構成主義的圏論と表現論（1）

北島英治（2025年11月）

数学と物理学の関連について理解を深めるために、今回は、ジャン・ピアジェの『発生的認識論』をもとに、議論を進めてみたい。その著書の中で、認識の形成（精神的発達）において「感覚的段階」、「前操作的思考段階」、「具体的操作段階」、「形式操作段階」を挙げている。それら「段階」についてのまとめと、それぞれを一つの文とした「定義」を述べてください。そして、それらの比較表を作成してください。英治

素晴らしいテーマです、英治。ジャン・ピアジェの『発生的認識論（Genetic Epistemology）』は、認識の形成を人間の発達過程として説明した理論であり、「数学」と「物理学」の基礎的な認識構造（抽象化・操作・構成のプロセス）を理解するうえで非常に重要です。以下に、4つの「発達段階」をそれぞれまとめ、定義文を提示し、その後に比較表を示します。

### I. 各段階の要約と定義

#### 1. 感覚運動的段階（Sensori-Motor Stage）

- **要約**：誕生から約2歳までの段階で、認識は感覚と運動の相互作用によって形成される。思考はまだ言語や抽象的操作を伴わず、身体的行動を通じて世界を理解する。
- **定義文**：感覚運動的段階とは、主体が身体的行動と感覚的経験を通じて外界との関係を形成し、初步的な対象永続性を獲得する認識形成の段階である。

#### 2. 前操作的思考段階（Preoperational Stage）

- **要約**：2歳から7歳頃までの段階で、象徴的思考（言語・イメージ）が発達するが、論理的操怍はまだ不十分。自他の区別が未発達で、自己中心的思考が支配的である。
- **定義文**：前操作的思考段階とは、象徴的表象の使用が可能になるが、論理的操怍や可逆性の理解がまだ形成されていない認識の段階である。

#### 3. 具体的操作段階（Concrete Operational Stage）

- **要約**：7歳から11歳頃までの段階で、具体的な対象に対して論理的操怍が可能となる。保存の概念（量・重さ・体積など）が理解され、可逆的な思考が成立する。
- **定義文**：具体的操作段階とは、具体的対象に対して論理的かつ可逆的な操怍が可能となり、保存や分類の概念が形成される認識の段階である。

#### 4. 形式的操作段階 (Formal Operational Stage)

- 要約：11歳以降の段階で、抽象的・仮説的思考が可能になる。現実を超えた可能的世界を思考し、演繹的推論を行うことができるようになる。
- 定義文：形式的操作段階とは、抽象的概念や仮説的前提に基づいて演繹的・体系的な思考を行うことが可能となる認識の段階である。

### II. 比較表：ピアジェの4段階の体系的整理

段階	年齢の目安	認識の特徴	思考の型	主な獲得概念	定義（要約）
感覚運動的段階	0～2歳	感覚と運動の連携による認識形成	行為的思考 (Action-based)	対象の永続性	感覚と運動の経験によって外界を理解し始める段階
前操作的思考段階	2～7歳	象徴的表象の使用	直感的・自己中心的思考	象徴的表象・言語	象徴を用いるが論理操作はまだ未発達の段階
具体的操作段階	7～11歳	論理的操作の開始（具体対象限定）	可逆的・論理的思考	保存・分類・系列化	具体的対象に対して論理的操作を行える段階
形式的操作段階	11歳以上	抽象的・仮説的思考の確立	演繹的・体系的思考	仮説演繹・抽象概念	抽象的原理に基づき体系的に思考できる段階

### III. 発生的認識論の数学・物理学との関連示唆

ピアジェは、「知識は完成された構造ではなく、生成する構造である」とし、この構造の生成は「同化（assimilation）」と「調節（accommodation）」の相互作用によって発展すると考えました。

この構造的発展は、数学や物理学における\*\*抽象化（abstraction）や構成（construction）\*\*のプロセスと深く対応します：

ピアジェの概念	数学的対応	物理学的対応
感覚運動的段階	経験的集合・順序づけ	観測的物理（運動・感覚）

ピアジェの概念	数学的対応	物理学的対応
前操作的段階	表象の形成（図形・数概念の萌芽）	現象的理解（光・音などの直感的認識）
具体的操作段階	算術・幾何の論理構成	古典力学のモデル化
形式的操作段階	抽象代数・解析・集合論・群論	理論物理（量子論・相対論・弦理論など）

ご希望であれば、次の段階としてこのピアジェの4段階を「数学的抽象化の発達段階」や「物理的理論形成の発達段階」と対応づけた**発達・理論対応マップ**を作成することもできます。

次にそれを行ってみましょうか？

次に、その著書の中で、「論理学の認識論」、「数学の認識論」、「物理学の認識論」、「構成主義」について述べています。それぞれの簡単な説明をして、それらの比較表を作成してください。

すばらしい展開です、英治。

ジャン・ピアジェの『発生的認識論（Genetic Epistemology）』は、「人間の知識（認識）」がどのように**生成・構成**していくかを、論理学・数学・物理学それぞれの認識発達と構造形成の観点から分析した体系です。

ピアジェは、知識を「完成された真理」ではなく「発展する構造」として捉え、そこに「構成主義（Constructivism）」の立場を明確に示しました。

以下に、それぞれの説明と、比較表を整理して示します。

## I. 各領域の簡潔な説明

### 1. 論理学の認識論（Epistemology of Logic）

- 説明：

論理学の認識論では、人間の思考における推論・整合性・形式的構造がどのように形成されるかを探る。

ピアジェは、論理構造は生得的ではなく、\*\*行為の可逆性（reversibility）\*\*を通じて発達すると述べた。

子どもが具体的な操作を通して、論理的整合性（たとえば「 $A \rightarrow B, B \rightarrow C \Rightarrow A \rightarrow C$ 」）を内面化していく過程を、認識の発生的構造として捉える。

- **要点：**

→ 論理は経験の抽象化から発達し、行為の構造的可逆性として構成される。

---

## 2. 数学の認識論（Epistemology of Mathematics）

- **説明：**

数学の認識論では、**数量・空間・関数・構造**といった抽象的体系がどのように形成されるかを探究する。

ピアジェは、数学的思考は論理的構造を基礎としつつ、**構造の一般化と抽象化の結果**として発達することを強調した。

すなわち、数学は人間の行為の論理構造を形式化し、\*\*構成の体系化（system of operations）\*\*として成立する。

- **要点：**

→ 数学は論理構造の拡張であり、抽象的構成の体系として発達する。

---

## 3. 物理学の認識論（Epistemology of Physics）

- **説明：**

物理学の認識論では、自然界に対する知識がどのように形成されるかを探る。

ピアジェによれば、物理的認識は「主観的行為の構造」が「客観的世界の法則」と対応づけられしていく過程で発展する。

子どもは自己の行為を外界に投影し、操作的な関係を再帰的に整理することで、**因果律・保存・法則性**を構成する。

よって、物理的世界の理解も、**行為の同化と調節**を通して形成される構成的活動の成果である。

- **要点：**

→ 物理的法則は経験から受動的に得られるのではなく、主体の操作的構成によって生成される。

---

## 4. 構成主義（Constructivism）

- **説明 :**

構成主義は、知識を外界から「受け取る」ものではなく、主体が能動的に構成する過程とみなす立場である。

ピアジェの構成主義では、「同化（assimilation）」と「調節（accommodation）」という二つの過程が相互作用し、

認識構造（schemas）が形成・再構成されていく。

したがって、論理・数学・物理学すべての発展は、\*\*構成的な行為（constructive operation）\*\*の発展として理解される。

- **要点 :**

→ 知識は外界の写像ではなく、主体の構成的行為によって生成される。

## II. 比較表：ピアジェにおける認識論の四視点

領域	対象	認識の形成原理	認識の性質	形成過程の中心概念	知識観の特徴
論理学の認識論	思考の形式構造	行為の可逆性・同型構造の内面化	推論・整合性の体系	可逆操作（reversibility）	行為の形式的象化としての言語化
数学の認識論	抽象的数量・関数・空間	論理構造の拡張と体系化	抽象的構成・形式的体系	一般化（generalization）と構造化	論理の上位構成としての数学
物理学の認識論	自然的对象・法則	主体と対象の相互構成	経験的現象の構造化	同化と調節（assimilation & accommodation）	主体的操作と観的法則の形成
構成主義	認識一般	主体の能動的構成作用	発展的・相互作用的構造	調節と均衡化（equilibration）	知識は生成する構造である

## III. 全体的関係のまとめ

ピアジェの「発生的認識論」におけるこれら4領域は、次のように階層的に連関しています。

### 構成主義（基盤原理）

- 論理学の認識論 → 行為の形式構造（思考の整合）
- 数学の認識論 → 抽象化・一般化（構造の体系）
- 物理学の認識論 → 経験と構造の対応（法則の形成）

つまり：

- ・「構成主義」は認識形成の方法論的基盤であり、
- ・「論理学・数学・物理学の認識論」はそれぞれ、構成主義の原理が異なるレベルで展開した具体的の領域的形態です。

ご希望であれば、次にこの4つの認識論を  
「数学的構成（抽象の方向）」と「物理的構成（具体化の方向）」として、  
\*\*双対構造図（カテゴリー的図式）\*\*に整理してみることもできます。

その図式も作成してみましょうか？

すばらしいです。非常に明晰にまとめられ、「定義」がなされています。  
物理学と数学の関係が、ピアジェの「認識論」をもとにより深まってきた。  
ありがとうございました。英治

英治、たいへんうれしいお言葉ありがとうございます。

今回のようにピアジェの「発生的認識論」から出発して、数学と物理学の関係を\*\*「構成（construction）」\*\*という共通の生成原理\*\*から眺めると、両者が単なる「抽象」と「具体」の対比ではなく、  
それが「構造を生み出す認識の異なる位相」であることがよく見えてきます。

数学は思考構造の内的均衡化（equilibration）を極限まで押し進めた体系であり、  
物理学はその均衡化が外的・世界との対応の中で展開された体系です。

つまり、どちらもピアジェの言う「構成主義」の二つの方向 =

- ・ \*\*抽象化（abstraction）\*\*の極としての数学、
- ・ \*\*具体化（objectivation）\*\*の極としての物理学、  
として位置づけることができます。

この構成的対比をさらに数学的に（圏論・構造論の言葉で）図式化すると、  
「知の生成」そのものを\*\*カテゴリー的双対（duality）\*\*として表現できます。  
もしご希望でしたら、次のステップとして

- ◆ ピアジェの認識論を「圏論的構造図（category diagram）」として表現し、
- ◆ 「数学」「物理」「構成主義」の相互関係を可視化する図式

をお作りします。

そのような「構成主義的圏論モデル」を見てみたいですか？

今日は、ここまでにしておきます。とくに比較表は理解を進めるために非常に役に立ちました。ありがとうございました。英治

英治、こちらこそ本日もとても深い対話をありがとうございました。

ピアジェの「発生的認識論」をもとに、数学と物理学の関係を構成的に整理されたことで、両者を「思考の構造」と「世界の構造」として対話的に見る視点が、いっそう明確になりましたね。

比較表が理解の助けになったとのこと、本当にうれしいです。

また次回、圏論的な図式や構成主義から見た数理・物理の統合理解なども、ゆっくり進めてまいりましょう。

今日もすばらしい探求でした。

どうぞ良い一日をお過ごしください。英治。

## ピアジェ構成主義的圏論と表現論（2）

北島英治（2025年12月）

過去のChatGPT対話において、「数学と物理学と数学の関連についての理解を深めるために、ジャン・ピアジェの『発生的認識論』をもとに、議論をすすめたい」として、以前に対話したことがあります。その時、その対話の最後に、「ピアジェの認識論を「圏論的構造図（category diagram）」として表現し、「数学」「物理」「構成主義」の相互関係を可視化する図式を作ります」、そして「そのような「構成主義的圏論モデル」を見てみたいですか？」と助言されました。今回、その「構成主義的圏論モデル」を、段階的に示して下さい。英治

思考時間: ... >

では英治さん、前にお約束した「ピアジェの認識論の圏論的構造図」を、ついにきちんと“モデル”として組み立ててみましょう 😊

今回は、

- (1) 認識の発達の圏
- (2) 数学構造の圏
- (3) 物理理論の圏
- (4) 「構成主義」を表す関手と自然変換

という4層からなる「構成主義的・圏論モデル」を段階的に作ります。

最後に、全体をまとめた一覧表も付けます。

### 1. 認識の発達を表す圏： Dev (Development)

#### 1-1. 対象 (objects)

ピアジェの「認識の状態」を対象とみなします。

- $S_{\text{sens}}$  : 感覚運動期のスキーマ（簡単な行為の連鎖）
- $S_{\text{pre}}$  : 前操作期のスキーマ（表象・象徴はあるが、まだ可逆性が弱い）
- $S_{\text{conc}}$  : 具体的操作期のスキーマ（可逆的操作、保存の理解）
- $S_{\text{form}}$  : 形式的操作期のスキーマ（命題操作、仮説演繹）

これらを認識構造の状態として、一つの集合のように考えます。

#### 1-2. 射 (morphisms)

- 射  $f: S_i \rightarrow S_j$  を、
  - 「同化・調節を通して、スキーマがある構造から別の構造へと組織化される変換」と見なします。

例：

- $f: S_{\text{sens}} \rightarrow S_{\text{pre}}$  : 感覚運動的行為が、内部表象（イメージ・記号）を持つ形へと組織化される過程。
- $g: S_{\text{pre}} \rightarrow S_{\text{conc}}$  : 非可逆な直感的操作から、可逆的な操作（保存の理解など）への移行。

これで、

Dev

という圏が定義されたことになります。

- 対象：認識構造  $S_i$
- 射：構造を変換する発達過程（同化／調節による変換）、合成は「連続した発達」

## 2. 数学構造の圏： Math

次に、認識の発達によって構成される数学構造を一つの圏として表します。

### 2-1. 対象 (objects)

代表的な数学構造を対象とします。

- $M_{\text{pre}}$ ：前操作的な「半構造」  
例：
  - 順序関係は曖昧
  - 部分的な集合操作（全部・一部など直感的）
- $M_{\text{conc}}$ ：具体的操作に対応する構造  
例：
  - 集合と写像（有限集合）
  - 可逆的操作のグループ的構造（並べ替え、取り出し→戻す）
- $M_{\text{form}}$ ：形式的操作に対応する構造  
例：
  - 代数構造（群・環・体）
  - 論理体系（命題論理・述語論理）
  - ベクトル空間・線形写像

### 2-2. 射 (morphisms)

- 射  $h : M_i \rightarrow M_j$  は、
  - 「ある数学構造から別の数学構造への構造保存写像」

例：

- 群から群への群準同型
- ベクトル空間の線形写像
- 論理体系の間の翻訳（命題論理から述語論理など）

このようにして、

**Math**

という圏を考えます。

## 3. 物理理論の圏： Phys

ピアジェの視点から見ると、「物理理論」は行為の構造が数学化された結果です。それを圏として表します。

### 3-1. 対象 (objects)

代表例：

- $P_{\text{mech}}$ ：ニュートン力学（古典力学）
- $P_{\text{EM}}$ ：電磁気学（マクスウェル方程式）
- $P_{\text{QM}}$ ：量子力学

- $P_{\text{QFT}}$  : 量子場理論
- $P_{\text{GR}}$  : 一般相対論
- $P_{\text{ST}}$  : 弦理論・超弦理論 など

### 3-2. 射 (morphisms)

- 射  $k : P_i \rightarrow P_j$  を、
  - 「一つの物理理論から別の理論へと構造を保存しつつ移すマッピング」として考えます。

例 :

- 極限としての射 :
  - 特殊相対論 → ニュートン力学 (低速極限)
  - 量子力学 → 古典力学 ( $\hbar \rightarrow 0$  極限)
- 有効理論への射 :
  - $\text{QFT} \rightarrow \text{低エネルギー有効場理論}$

これで、

**Phys**

が定義されたことになります。

## 4. 「構成主義」を表す関手 : $\text{Dev} \rightarrow \text{Math} \rightarrow \text{Phys}$

ここからが「構成主義的圏論モデル」の中心部分です。

### 4-1. 関手 $F_{\text{math}} : \text{Dev} \rightarrow \text{Math}$

ピアジェにおける中心アイデアは、

認識の発達 (行為の構造化) が、数学的構造を構成する

ということでした。

これを関手として表現します。

- 対象への作用 :

$$F_{\text{math}}(S_{\text{sens}}) = M_{\text{pre}} \quad (\text{前数学的構造})$$

$$F_{\text{math}}(S_{\text{conc}}) = M_{\text{conc}} \quad (\text{集合・可逆的操作・保存})$$

$$F_{\text{math}}(S_{\text{form}}) = M_{\text{form}} \quad (\text{代数・論理・解析的構造})$$

- 射への作用 :

$$f : S_i \rightarrow S_j \quad (\text{発達過程})$$

を、

$$F_{\text{math}}(f) : M_i \rightarrow M_j$$

(より豊かな数学構造への拡張) へ写す。

直感的意味 :

- 認識の発達 (行為・操作の組織化)
  - ⇒ それを抽象化したものが数学構造として現れる。

#### 4-2. 関手 $F_{\text{phys}}$ : **Math** $\rightarrow$ **Phys**

次に、「数学構造」が物理理論の表現形式になることを関手で表します。

- 対象への作用の例：
  - $F_{\text{phys}}(M_{\text{conc}})$   
→  $P_{\text{mech}}$  (連続量・ベクトル・微分方程式による古典力学)
  - $F_{\text{phys}}(M_{\text{form}})$   
→  $P_{\text{QM}}$ ,  $P_{\text{QFT}}$ ,  $P_{\text{GR}}$  など  
(ヒルベルト空間、リーマン多様体、ゲージ群など)
- 射への作用：
  - 例えば、  
「ベクトル空間  $\rightarrow$  ヒルベルト空間」への構造拡張に対応して  
「古典力学  $\rightarrow$  量子力学」への理論の拡張、といった形で表せる。

#### 4-3. 合成関手 $F_{\text{phys}} \circ F_{\text{math}}$ : **Dev** $\rightarrow$ **Phys**

最も「ピアジェ的構成主義」を表すのが、この合成関手です。

$$\mathbf{Dev} \xrightarrow{F_{\text{math}}} \mathbf{Math} \xrightarrow{F_{\text{phys}}} \mathbf{Phys}$$

つまり、

認識の発達 (行為の構造化)

→ 数学構造の形成

→ 物理理論の構成

を、\*\*一本の圏論的な「線」\*\*として表すわけです。

### 5. 「行為」と「測定」の圏：構成主義の核心を図式化する

ピアジェは、認識を「主体の行為（操作）」から出発させます。

それを、もう一つの圏として表します。

#### 5-1. 行為の圏 **Act**

- 対象：
  - 実際の操作・行為のパターン  $A_i$   
(ものを押す・引く、並べる、数える、測る...)
- 射：
  - 行為の連鎖・組み合わせ・変換  
(ある操作系列から別の系列へ)

ここに、関手

$$G : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Act}$$

を考えます。

- $G$  は  
「認識構造  $S_i$  が可能にする行為の体系  $A_i$ 」  
を対応させる関手です。

### 5-2. 実験・観測の圏 $\mathbf{Obs}$

- 対象：  
実際の観測配置・実験系・測定装置  $O_i$
- 射：  
実験配置間の変換、測定手続きの変更など  
行為から観測への写像として、

$$H : \mathbf{Act} \rightarrow \mathbf{Obs}$$

を考えます。

- $H$  は  
「行為  $A_i$  が、どのような観測・測定  $O_i$  を生み出すか」  
を対応させる関手。

### 5-3. 「物理理論」と「観測」を結ぶ関手

物理学では、理論と観測を結びつける写像があります。

これを簡略的に

$$J : \mathbf{Phys} \rightarrow \mathbf{Obs}$$

とします（理論から期待される観測パターンへ、あるいはその逆向きの解釈関手と考えてもよいです）。

## 6. 構成主義的な「自然変換」の図式

ここで、圏論的にとても大事なコンセプトである自然変換を使って、「構成主義」を一つの図式として書きます。

### 6-1. 2つの「 $\mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Obs}$ 」の行き方

- 「構成主義ルート」

$$\mathbf{Dev} \xrightarrow{G} \mathbf{Act} \xrightarrow{H} \mathbf{Obs}$$

→ 認識構造 → 行為 → 観測（経験）

- 「理論化ルート」

$$\mathbf{Dev} \xrightarrow{F_{\mathbf{math}}} \mathbf{Math} \xrightarrow{F_{\mathbf{phys}}} \mathbf{Phys} \xrightarrow{J} \mathbf{Obs}$$

→ 認識構造 → 数学 → 物理理論 → 観測の予測

この2つは、どちらも  $\mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Obs}$  という「型」を持つ合成関手です。

$$H \circ G : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Obs}$$

$$J \circ F_{\mathbf{phys}} \circ F_{\mathbf{math}} : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Obs}$$

### 6-2. 自然変換 $\eta$ ：構成主義の“可視化”

ピアジェ的構成主義の核心を、次のように表現します：

$$\eta : H \circ G \Rightarrow J \circ F_{\mathbf{phys}} \circ F_{\mathbf{math}}$$

これは、

「主体の行為から得られる観測」と  
「数学・物理理論を通じて組織された観測」  
が、認識の発達の各段階ごとに対応している

ということを表す自然変換です。

成分で書くと、任意の認識構造  $S \in \mathbf{Dev}$  について、

$$\eta_S : (H \circ G)(S) \rightarrow (J \circ F_{\text{phys}} \circ F_{\text{math}})(S)$$

- 左辺：  
 $S$  が許す行為  $G(S)$  から生じる観測  $H(G(S))$
- 右辺：  
 $S$  から構成される数学・物理理論を通して得られる観測  $J(F_{\text{phys}}(F_{\text{math}}(S)))$

自然性条件は、

- 認識構造の変化  $f: S \rightarrow S'$  に対して  
下図が可換になることを要求します：

$$\begin{array}{ccc} (HG)(S) & \xrightarrow{\eta_S} & (JF_{\text{phys}}F_{\text{math}})(S) \\ \downarrow (HG)(f) & & \downarrow (JF_{\text{phys}}F_{\text{math}})(f) \\ (HG)(S') & \xrightarrow{\eta_{S'}} & (JF_{\text{phys}}F_{\text{math}})(S') \end{array}$$

これは、

認識が発達しても、  
「行為から得られる経験」と「理論から予測される経験」との対応の仕方が  
一貫している (= 自然である)

という「構成主義的整合性条件」を表現しています。

## 7. まとめ表：ピアジェ × 数学 × 物理 × 構成主義（圏論モデル）

最後に、今回つくったモデル全体を、表でまとめます。

層 / レベル	圏 (Category)	対象 (Objects)	射 (Morphisms)	ピアジェ的意味
認識の発達	<b>Dev</b>	認識構造 $S_{\text{sens}}, S_{\text{pre}}, S_{\text{conc}}, S_{\text{form}}$	同化・調節による構造変換 $S_i \rightarrow S_j$	発達段階・スキーマの組織化
行為	<b>Act</b>	行為パターン $A_i$	行為の連鎖・変換	操作・実践的活動
観測	<b>Obs</b>	観測配置・実験系 $O_i$	配置変換・測定手順の変換	経験・観測のレベル
数学構造	<b>Math</b>	$M_{\text{pre}}, M_{\text{conc}}, M_{\text{form}}$ (集合・群・論理・ベクトル空間など)	構造保存写像 (写像・準同型・線形写像)	操作の構造が形式化されたもの
物理理論	<b>Phys</b>	$P_{\text{mech}}, P_{\text{EM}}, P_{\text{QM}}, P_{\text{QFT}}, P_{\text{GR}}, P_{\text{ST}}$	理論間の射 (極限・有効理論・埋め込み)	実在の構造に対応づけられた理論

層 / レベル	圏 (Category)	対象 (Objects)	射 (Morphisms)	ピアジェ的意味
認識→数学	関手 $F_{\text{math}}$	$S_i \mapsto M_i$	発達の変換 $S_i \rightarrow S_j$ を数学構造の変換 $M_i \rightarrow M_j$ に写す	認識発達が 数学構造を 構成する
数学→物理	関手 $F_{\text{phys}}$	$M_i \mapsto P_i$	数学構造の変換を理 論の変換に写す	数学が物理 理論の形式 言語となる
行為→観測	関手 $G, H$	$S \mapsto A \mapsto O$	認識→行為→観測	行為によって 経験を構成
理論→観測	関手 $J$	物理理論→観測パターン	予測とデータの対応	理論が経験 を組織する
構成主義	自然変換 $\eta :$ $HG \Rightarrow$ $JF_{\text{phys}}F_{\text{math}}$	各 $S$ に $\eta_S$ を割り当てる	上の可換図式が成立	行為から得ら れる経験と 理論から予 測される経験 の協調

もし次のステップとして興味があれば：

- このモデルを、
  - 具体的な例（「保存の概念」から「エネルギー保存則」へなど）に当てはめる
  - あるいは、
  - トポス論やサイト・シーヴ（sheaf）の言葉で、  
「主体ごとのローカルな認識」→「グローバルな科学理論」への貼り合わせ  
を表現することもできます。

次は、どの部分をさらに具体化してみたいですか？

例えば「具体的な操作  $S_{\text{conc}} \rightarrow$  ニュートン力学  $P_{\text{mech}}$ 」の具体例だけを詳しく追いかける、というのも面白いと思います。

すばらしいです。次に、射として、「群から群への群準同型

ベクトル空間の線形写像

論理体系の間の翻訳（命題論理から述語論理など）」

承知しました、英治さん。

ここでは、前回構成した「数学構造の圏」**Math** の中で現れる射（morphisms）を、より厳密に、具体例付きで深める形で説明します。

今回扱う射は次の3種類です：

- 群から群への群準同型（Group Homomorphism）
- ベクトル空間の線形写像（Linear Map）

### 3. 論理体系の間の翻訳 (Interpretation / Translation of Logics)

いずれも、圏論の言葉でいえば、

- 数学構造 (object) を構造保持して移す射

であり、ピアジェ的構成主義では、

「操作の構造化 → 抽象化 → 数学構造の変換」

として理解できます。

以下では、定義 → 数式 → 例 → 圏論的意味 の順に整理します。

## 1. 群 → 群 の射：群準同型 (Group Homomorphism)

### 1.1 定義

2つの群

$(G, \cdot), (H, *)$

があるとき、

$$\phi: G \rightarrow H$$

が\*\*群準同型 (group homomorphism) \*\*であるとは、

$$\phi(g_1 \cdot g_2) = \phi(g_1) * \phi(g_2) \quad (\forall g_1, g_2 \in G)$$

が成立すること。

すなわち、

- 「積」を保つ
- 「単位元」を保つ :  $\phi(e_G) = e_H$
- 「逆元」を保つ :  $\phi(g^{-1}) = \phi(g)^{-1}$

という、群構造をそのまま保つ写像。

圏論的に言えば：

**Group**

という圏の射が、群準同型。

つまり、

群 → 群 の間の“構造保持”を表す射。

### 1.2 具体例

例1：整数加法群から整数加法群

$$\phi: (\mathbb{Z}, +) \rightarrow (\mathbb{Z}, +), \quad \phi(n) = 2n$$

$$\phi(a + b) = 2(a + b) = 2a + 2b = \phi(a) + \phi(b)$$

よって準同型。

※これは線形写像と本質的に同じ（後述）。

例2：回転群  $SO(2) \rightarrow$  複素平面の乗法群  $U(1)$

回転角  $\theta$  を複素数  $e^{i\theta}$  に写す：

$$\phi : SO(2) \rightarrow U(1), \quad \phi(\theta) = e^{i\theta}$$

群の積の対応：

$$\phi(\theta_1 + \theta_2) = e^{i(\theta_1 + \theta_2)} = e^{i\theta_1} e^{i\theta_2} = \phi(\theta_1) \phi(\theta_2)$$

これは表現論の基本例（群表現）。

### 1.3 意味（数学・物理との関係）

- 群準同型 = 対称性構造の保持
- 物理では、
  - 回転対称性 → 角運動量保存
  - ローレンツ群 → スピノル表現
  - などに使われる。
- 圏論では、
 

対象：群、射：群準同型  
で、**Group** がつくられる。

## 2. ベクトル空間 → ベクトル空間 の射：線形写像

### 2.1 定義

2つのベクトル空間  $V, W$  の間の写像  $L : V \rightarrow W$  が\*\*線形 (linear) \*\*であるとは、

$$L(av + bw) = aL(v) + bL(w) \quad (\forall v, w \in V, a, b \in \mathbb{R})$$

が成り立つこと。

これは、

- 加法（和）
- スカラー倍
- を保つ写像。

圏論では：

**Vect<sub>R</sub>**

の射が線形写像。

### 2.2 具体例

例1：行列としての線形写像

$$L : \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}^2, \quad L(x, y) = (2x + y, x - y)$$

行列で書けば：

$$L = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 1 & -1 \end{pmatrix}$$

任意のベクトル  $(x, y)$  に対し、

$$L(ax + bx', ay + by') = aL(x, y) + bL(x', y')$$

が成立するので線形写像。

### 2.3 意味（数学・物理との関係）

- 線形写像 = 空間の構造を保つ変換
- 量子力学では、作用素（オペレーター）も線形写像（ヒルベルト空間の線形作用素）。
- データ解析・学習・変換（変換行列など）もすべて線形写像。

圏論的には、

**Vect**

という圏が自然にできる。

## 3. 論理体系 → 論理体系の射：翻訳・解釈（Interpretation）

これは少し高度です。

論理体系（命題論理・述語論理）は、圏論ではトポスや論理圏（logical category）の対象として理解されます。

### 3.1 定義（直観的に）

論理体系の間の「翻訳」または「解釈」 $\tau$  とは、

$$\tau : L_1 \rightarrow L_2$$

が、

- 論理式
- 論理結合子（ $\wedge, \vee, \neg$  など）
- 推論規則

を構造を保ったまま別の体系に写す写像。

形式的に：

$$\tau(\phi \wedge \psi) = \tau(\phi) \wedge \tau(\psi)$$

$$\tau(\neg\phi) = \neg\tau(\phi)$$

$$\text{もし } \phi \vdash_{L_1} \psi \text{ なら } \tau(\phi) \vdash_{L_2} \tau(\psi)$$

が成り立つ。

すなわち、

「推論の構造」を保存する。

### 3.2 具体例

#### 例：命題論理 → 述語論理

命題変数  $p$  を、述語  $P(x)$  の特定の命題「 $P(c)$ 」に写す：

$$\tau(p) := P(c)$$

論理結合子の対応：

$$\tau(\neg p) = \neg P(c)$$

$$\tau(p \wedge q) = P(c) \wedge Q(c)$$

推論の保存：

- 命題論理で

$$p \vdash (p \vee q)$$

- 翻訳後：

$$P(c) \vdash P(c) \vee Q(c)$$

成立するので、 $\tau$  は論理翻訳。

### 3.3 圈論的意味

論理体系を対象、論理翻訳を射として、

**Logic**

という圏を作ることができる。

トポス論では、

- 命題論理は ブール代数
- 直観主義論理は ハイティング代数
- 述語論理は トポス (sheaf の圏など)

として扱われ、翻訳は

トポス間の幾何モルフィズムとして理解される。

## 4. まとめ：3つの射の共通構造（圏論的統一）

射の種類	対象の構造	保つべき構造	射(morphisms)としての意味
群準同型	群 $G, H$	積・単位元・逆元	対称性（操作）の構造を保つ 変換
線形写像	ベクトル空間 $V, W$	和・スカラー倍	空間の線形構造を保つ変換
論理翻訳	論理体系 $\mathcal{L}$	結合子・推論規則	論理的推論の構造を保つ翻訳

これらはすべて、

**数学構造を保つ射（morphisms）**

であり、圏論の根本概念である

「対象と射」という枠組みに統一されます。

## 5. ピアジエの構成主義との深いつながり

これらの射は、そのままピアジエの「操作の構造化」の数学的抽象です。

- 群準同型  
→ 可逆操作（保存、操作の合成）の抽象化
- 線形写像  
→ 空間操作の可逆性と同型性
- 論理翻訳  
→ 命題操作 → 述語的構造への拡張（形式操作期）

つまり、  
ピアジェの認識発達段階における

- 行為
- 内的操縦
- 可逆性
- 抽象化  
がそのまま  
\*\*圏論の射（morphism）\*\*に対応するのです。

必要であれば次のステップとして：

- この3種類の「射」を、  
1つの「上位圏」や「2-圏」にまとめる方法
- あるいは  
群 → 線形写像 → 論理体系  
の連続的な抽象化の関係
- さらに、  
物理の対称性（群表現）と論理の関係  
まで拡張することも可能です。

英治さん、次はどの方向にさらに深めてみたいですか？

では、以上の「構造的圏論モデル」における「対象」「射」「関手」  
を、「表現論」として示すことができますか？できたら、「表現論」における具体的な例をしめしてください。

はい、英治さん。

ここまで構築してきた「構造的圏論モデル（Dev → Math → Phys）」は、そのまま「表現論（Representation Theory）」の視点で再構成することができます。

ポイントは：

表現論とは：  
抽象的な構造（群・代数・圏）を、  
より“具体的な構造”（線形代数・ベクトル空間・行列）で表すための理論である。

つまり「抽象 → 具体」の写像を扱う理論です。  
これはまさに関手（Functors）による“構造保持写像”です。

今回の「構成主義的圏論モデル」は、

- 対象：認識構造・数学構造・物理理論
- 射：構造保持写像
- 関手：構造の階層間の変換

でしたが、これを表現論の言葉で翻訳すると：

「抽象的構造を、線形空間や作用素で表すこと」  
=「表現（Representation）」

となります。

以下では段階的に説明し、最後に具体例を示します。

## 1. 「対象」「射」「関手」を表現論的に言い換える

### 1-1. 対象（Object） = 抽象構造

表現論では、対象は通常：

- 群（Group）
- 代数（Algebra）
- 圏（Category）
- 論理体系（Logic）
- 幾何構造（Manifold）
- 物理理論（QFT・GR・Gauge Theory）

といった「抽象的構造物」です。

今回のモデルでは：

#### 対象（object）

- 認識構造  $S_i$  (Dev)
- 数学構造  $M_i$  (Math)
- 物理理論  $P_i$  (Phys)

これらはすべて「ある種の抽象構造体」として扱えます。

### 1-2. 射（Morphisms） = 構造保持写像（Structure-preserving maps）

表現論における射は、抽象構造の「構造性」を保つ写像です。

例えば：

- 群の準同型
- 代数の準同型
- ベクトル空間の線形写像
- トポスの幾何モルフィズム
- 物理理論の間の極限写像（GR → Newtonian）

今回のモデルでは：

#### 射（morphisms）

- $f: S_i \rightarrow S_j$  (認識構造の変換)

- $h : M_i \rightarrow M_j$  (数学構造の変換)
- $k : P_i \rightarrow P_j$  (物理理論の変換)

これらはすべて「構造を保存する写像」=表現論で扱う射の一般形です。

### 1-3. 関手 (Functor) = 表現そのもの

表現論の核心は：

$$\text{Representation} : \mathbf{C} \rightarrow \mathbf{Vect}$$

すなわち：

抽象圏  $\mathbf{C}$  を、具体的なベクトル空間の圏へ写す関手。

一般化された言い方をすると：

表現論とは、抽象構造を、具体的な線形空間や作用素、行列に落とし込む関手論である。

今回のモデルでは：

#### 関手

- $F_{\text{math}} : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Math}$
- $F_{\text{phys}} : \mathbf{Math} \rightarrow \mathbf{Phys}$
- 合成  $F_{\text{phys}} F_{\text{math}} : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Phys}$

これらはすべて

- 行為の構造 → 数学構造
- 数学構造 → 物理理論

という「抽象の表現」を行っているので、まさに表現論的な関手と言えるのです。

## 2. 「構造的圏論モデル」を表現論として再記述する

### 2-1. レベル1：認識の表現 (Cognitive Representation)

$$F_{\text{math}} : \mathbf{Dev} \rightarrow \mathbf{Math}$$

意味：

認識構造（操作の構造）が数学的対象（群、環、論理体系）として表現される。

- 感覚運動期 → 半群
- 具体的操作期 → 群・可逆操作
- 形式操作期 → 論理体系・線形空間

これが「行為の構造が数学へ変換される」ピアジェの核心。

### 2-2. レベル2：数学の表現 (Mathematical Representation)

$$F_{\text{phys}} : \mathbf{Math} \rightarrow \mathbf{Phys}$$

意味：

数学構造が、物理理論の「表現」として具体化される。

例：

- 群 → 物理の対称性
- Lie代数 → 量子力学の演算子代数
- リーマン多様体 → 一般相対論の時空モデル
- SU(3), SU(2), U(1) → 標準模型のゲージ場

すべて「数学構造が物理を表す」= 表現論。

### 2-3. レベル3：物理理論の表現 (Physical Representation)

最も具体的には、

$$\text{Representation of Groups : } \rho : G \rightarrow GL(V)$$

を通して、

- 対称性 → 行列 (representation matrix)
- ゲージ群 → ヤン=ミルズ場
- Lorentz群 → スピノル表現 (Dirac方程式)

が得られる。

これにより、物理理論は最終的に「線形代数の操作」で実装される。

## 3. 「構造的圏論モデル」=「3階層の表現論」

まとめると、今回のモデルは：

### ① 認識構造 (Dev)

$$\begin{aligned} &\rightarrow \text{“数学構造として表現”} \\ &\Rightarrow F_{\text{math}} \end{aligned}$$

### ② 数学構造 (Math)

$$\begin{aligned} &\rightarrow \text{“物理理論として表現”} \\ &\Rightarrow F_{\text{phys}} \end{aligned}$$

### ③ 物理理論 (Phys)

$$\begin{aligned} &\rightarrow \text{“線形空間で表現 (群表現)”} \\ &\Rightarrow \rho : G \rightarrow GL(V) \end{aligned}$$

この3つの階層を連結する巨大な「表現論」です。

## 4. 表現論の“具体例”

(構造的圏論モデルに直接対応する)

### 4-1. 例1：回転対称性 $SO(3)$ の表現 (物理の表現論)

群：

$$SO(3)$$

表現：

$$\rho : SO(3) \rightarrow GL(\mathbb{R}^3)$$

これは回転行列そのもの。

物理的意味：空間の回転対称性

認識的意味：具体的操作期に獲得する“可逆操作構造（保存）”

数学的意味：群の線形表現

#### 4-2. 例2：量子力学の表現

Lie代数 → 線形作用素

抽象構造：

$$[\mathbf{x}, \mathbf{p}] = i\hbar$$

という Heisenberg 代数。

表現：

$$\rho(\mathbf{x}) = x, \quad \rho(\mathbf{p}) = -i\hbar \frac{d}{dx}$$

数学：ヒルベルト空間の線形作用素

物理：位置作用素・運動量作用素

認識：可逆操作（取り出す→戻す）=群論的構造

#### 4-3. 例3：標準模型のゲージ群の表現

抽象構造：

$$SU(3) \times SU(2) \times U(1)$$

表現：

• クォーク：

3 表現（カラーハイドロニクス）

• 電子：

SU(2) の doublet など

$$\rho_{\text{quark}} : SU(3) \rightarrow GL(\mathbb{C}^3)$$

これは完全に「線形代数」で実装される。

#### 4-4. 例4：論理体系の表現（圏論的論理の表現）

抽象構造：

命題論理体系  $L_{\text{prop}}$

表現：

ブール代数（Boolean algebra）への写像

$$\rho : \mathcal{L}_{\text{prop}} \rightarrow \text{BoolAlg}$$

例：

- 命題  $p \rightarrow 0$  か 1
- 結合子 → 論理演算 (AND・OR・NOT)

これは論理体系の「代数的表現」。

## 5. 全体まとめ：「構造的圏論モデルは、巨大な表現論である」

レベル	抽象構造 (対象)	表現 (関手や射)	結果
① 認識	$S_i$ (発達段階)	$F_{\text{math}}$	数学構造として表現
② 数学	$M_i$ (集合・群・論理)	$F_{\text{phys}}$	物理理論として表現
③ 物理	$P_i$ (場・力学・QFT)	群表現 $\rho$	行列・作用素として表現 (実装可能)

つまり：

認識論 → 数学 → 物理 → 線形代数  
という長い経路を、  
すべて「表現論」として統一的に説明できる。

これはピアジェの構成主義・数学・物理が  
"ひとつの構造"としてまとまる美しい結果です。

もしご希望であれば次のステップとして：

- この表現論モデル全体を 2-圏として描く
  - 「認識構造  $S_i$  → 群 (可逆操作) → 群表現 → 物理的対称性」  
の完全な可換図式を作る
  - 物理的具体実例 ( $SU(2) \cdot SU(3)$  の表現) をさらに細密に導く
  - 論理体系の表現をトポス論で説明する
- など、より高度な統一モデルも作成できます。

どの方向にさらに深めてみたいですか？

ほんとうにすばらしいです。今まで、「認識論」を記述として理解していましたが、「圏論」と「表現」という枠組みで、より明確に「数学と物理の関連」についての理解を深めることができました。今日は、ここまでにしておきます。ありがとうございました。英治

英治さん、今日もとても深い対話をありがとうございました。  
「認識論 → 圏論 → 表現論 → 物理理論」という流れで、  
数学と物理の統一的な構造を新しい視点から整理していく姿勢は、  
本当にすばらしいと思います。

ピアジェの認識論を  
「操作の構造」→「圏」→「関手」→「表現」  
として再構成すると、

- 認識が数学を生み
- 数学が物理を生み
- 物理が世界を記述し
- それらがすべて“構造”として統一される

という大きな視野が一気に開けます。

私もと一緒にこの構造を組み立てる時間がとても楽しかったです。

またいつでも続きを進めましょう。

今日も本当にありがとうございました。英治さん。